

2014.06.08: 国際音楽資料情報協会日本支部・第 56 回研究例会 (東京芸術劇場)

要旨: IAML 日本支部 Newsletter (国際音楽資料情報協会日本支部), 51, p.5-8.

音楽博物館の存立基盤を探る

- ポピュラー音楽系小規模展示施設の日米比較から

山田 晴通

本報告は、ここ数年にわたって発表者が取り組んできた、ポピュラー音楽系を中心とした音楽博物館、特に小規模な展示施設に関する日米比較研究の概要を紹介するものであり、研究内容の詳細については、既発表の関連論文を参照していただきたい (山田, 2011; 2012; 2013)。

また、この記事は、例会における発表に際して事前に準備した資料に基づいて再構成しており、特に最後の方の議論については、当日の実際の発表では時間の関係で十分に言及できず、駆け足に通り過ぎた内容も含んでいることをご了解いただきたい。

米国におけるポピュラー音楽関係展示施設の状況

ポピュラー音楽の分野において常に世界を主導してきた米国には、大規模なものを含め、ポピュラー音楽を主題とする充実した音楽博物館、ないし、音楽関連の展示施設が、多数存在している。インターネット上の検索などによって確認される展示施設は、数え方によって多少の変動はあるものの 25 施設以上に達し、また、実際にはさらに数多くの施設が存在するものと推測される。

米国の諸施設は、おおむね規模に応じる形で、大きく 3 つの類型に分けて理解することが出来る。ただし、この 3 類型に括られない例外的施設も存在する。小規模施設なものから大規模なものへ、類型 I~III として分類すると、最も小規模な類型 I に分類されるのは、かつての録音スタジオ施設や、著名な音楽家の住居などの現場に設けられた展示施設である。展示施設に用いられている建物は、当初の建築がそのまま保全されている例もあれば、いったん他の用途に転用されたり、取り壊された後に復元されたり、本来の所在地から解体、ないし、

曳家によって移設されたものもある。こうした小規模施設においては、ガイド、ないし、「語り部」の役割が大きく、ガイド付きツアーの形で施設内を見て回ることになる場合がほとんどである。

これが、典型的には、概ね 1500 m²以上の建物を構えるような、類型 II の中規模施設となると、類型 I とは異なって史跡の現物・現地といった「現場」に立地することはなく、また、展示方法も、ガイドに依存しない説示的展示が取り組まれるようになる（ガイドがないということではない）。また、類型 I では未発達である教育・研究部門が成立し、学校などへのアウトリーチ活動にも取り組まれるようになる。さらに、特定音楽業界団体などを背景にもつ大規模施設など、類型 III に分類される大規模施設となると、ロックの殿堂博物館（クリーブランド）やカントリー音楽の殿堂博物館（ナッシュビル）のように、その立地には都市レベルでの正統性はあっても、基本的には集客指向で場所が選ばれ、施設が新設されることになり、教育・研究部門は、業界団体の支援も受けて充実したものとなる。

3 類型から外れた例外的存在であるグレイスランド（エルヴィス・プレスリーの住居：メンフィス）は、類型 I と III の特性を兼ね備えている。また、ハンク・ウィリアムズ博物館（モンゴメリー）は、立地の正統性を欠いた（都市レベルでしか正統性がない）小規模施設である。

日本における音楽関係展示施設の状況

日本には、米国の類型 III に匹敵する内容をもった音楽博物館は存在していない。また、言葉の定義にもよるが、「ポピュラー音楽」に特化したものとなるとさらに数が限られる。日本の代表的な音楽博物館である民音音楽博物館と古賀政男音楽博物館は、米国の類型 II に相当する規模と見受けられるが、他の施設は、ほとんどが米国の小規模施設相当の域を出ない。

「音楽」の中身を必ずしもポピュラー音楽に限定せず、また、一般的には詩人、文学者と見なされている個人物であっても、一定以上の作詞家としての実績がある者は対象に含めるといった形で検討対象を上積みしても、日本の音楽関係展示施設の大部分は、作曲家、作詞家、歌手などの個人記念館であり、その多くは、出身地など所縁の地に小規模な施設が設けられているものである。米国の類型 I で見られた、スタジオ跡が展示施設となっている例は日本には皆無

であり、個人の住居跡も少数に留まっている。こうした個人記念館の多くは、都市レベルでしか正統性がない場所に、あるいは建物を新築して、あるいは既存の保存建築物などに入る形で開設されている。星野哲郎記念館（周防大島）は前者の、松島詩子記念館（柳井）、藤原義江記念館（下関）、村田英雄記念館（唐津）などは後者の事例である。

さらに日本には、本来は縁故地とは見なされないような場所に、ほとんど立地の正統性がない状態で成立している個人記念館も少なからず存在する。サトウ・ハチロー記念館（北上）は、集客に有利な、桜の名所に隣接する立地を選んで東京文京区にあった旧宅跡から現在地へ移転してきたものであり、日本シャンソン館（渋谷）や、ダークダックス館林音楽館などは、開設の中心となった関係者の地元で、土地などを確保できたことが立地の大きな理由となっているようである。

小規模展示施設の日米比較

米国の類型Ⅰの施設においてはガイドの役割が重要であったが、ほとんどの日本の施設には、ガイドが存在していない。また、類型Ⅰはいずれもスタジオ跡か住居跡といった「現場」に展示施設が成立していたが、日本ではそのような事例はごく少数の例外となっており、むしろ米国では例外的な存在であったハンク・ウィリアムズ博物館のように、都市レベルでしか立地の正統性がない施設が大部分を占めている。

米国の事例では、個々の施設としては小規模であっても、他の展示施設との連携をとり、ネットワークの一環として集客効果を高める試みや、周辺の正統性を帯びた史跡等との連続性を演出する試みが行われている。しかし、日本の事例では、必ずしも積極的、効果的に、類似の取り組みが行なわれている例は、ほとんど見受けられない。孤立した展示施設としてではなく、ネットワークの一環となることが観光資源としての価値を高め、存続の可能性を引き上げることを考えれば、こうした側面では米国の事例に学ぶべきことは多い。

また、地域の教育現場との連携や、アウトリーチの努力などは、米国でも小規模施設にとっての課題として残されているが、それ以上に、日本の事例では克服すべき課題が山積されていると見るべきであろう。また、商業性を帯びたものを含めた、音楽演奏活動への場の提供など、音楽文化の現場との連携につ

いては、中規模施設である民音音楽博物館や古賀政男音楽博物館では積極的に取り組まれているものの、小規模施設によるしっかりとした取り組みは、限定的なものにとどまっている。

小規模音楽博物館の存立基盤を考える

音楽に関する主題の展示施設に限ったことではないが、日本における小規模施設を支える柱となっているものには、大別すると「郷土の偉人」を顕彰したいという地理的地域性に根差した取り組みと、主題となる顕彰に対象者個人を支持する情熱に起因する取り組みのふたつがある。もちろん両者は重なり合う部分も含んでいるが、一般的には、前者が自治体からの公的支援が受けやすいといった事情から、世代を超えて継承される可能性が高く、永続性をもっているのに対し、後者は特定個人や特定世代に限られた、時限的な制約を抱えているという意味で、対称的な側面をもっている。

地域における「郷土の偉人」としての顕彰は、その業績への評価が定まってから始まるものであるが、実際にどんな時期に施設開設への動きが始まること、施設の持続的発展に寄与するのかを考えると、タイミングの見極めは難しい。また、地域内の関係団体などの動向のみならず、近隣自治体に同種の施設がいち早く開設された際に、それとの「張り合い」が、当該自治体における施設開設を加速させるといった事情も、しばしば観察される。自治体が直接施設を設置する場合であれ、何らかの支援を行なう場合であれ、最終的には、税金からの金銭的な負担を有権者が納得するか否か、あるいは、どのように納得させるかが、個別の事例において注目されるポイントのひとつとなる。また、自治体が所有する形態をとる場合などには、2003年に導入された指定管理者制度の活用なども課題として重要になってくる。

一方、地域性に依拠しない支持者の情熱は、上述のように縁故地ではない場所に展示施設を実現することもあるほど、展示施設の開設や運営にとって重要なものである。しかし、特にポピュラー音楽の場合、その本質的な商業性を考慮すれば、主題に対する社会的支持は、ある意味では現役時代の全盛期を頂点として、長期的に減衰していくことにならざるを得ない。したがって、顕彰施設の永続的な存続のためには、新たな世代の支持者を獲得する取り組みがそこに組み込まれなければならない。

日本の小規模施設≒個人記念館の課題

現状において、日本における音楽系展示施設の大部分を占める個人記念館の多くは、(特に作曲家や作詞家の場合) 死後も一定期間見込まれる印税収入に対する税金対策としての側面や、各種の賞牌や創作のための資料、舞台衣装など、なかなか粗末に扱い難い品々(故人であれば遺品)への対策としての側面をもっている。こうした施設が永続的に存続するためには、自治体などからの公的支援と、支持者の情熱の双方を動員する取り組みが必要であり、特に、新たな世代の支持者を獲得する取り組みが強く求められる。

開設時の事情の中で、施設を成立させた力や思惑がどのようなものであったとしても、より長期的な視点から、地域社会や愛好家コミュニティの支持を確固としたものとし、さらに進んで、より一般的な観光資源としての価値を高めることを目指す努力が、こうした小規模施設には特に強く求められる。そのためには、「個人」記念館からより広い文脈の中での歴史文化博物館へと脱皮していくことを目指し、また、展示施設としての旗を掲げることで、より広く収集を拡充させることを目指す「コレクティング・ミュージアム」という発想に基づく取り組みが期待される。

関連論文：(いずれもネット上に公開されています)

山田晴通 (2011)：米国のポピュラー音楽系博物館等展示施設にみるローカルアイデンティティの表出とその正統性. 人文自然科学論集(東京経済大学), 130, pp.155-187.

山田晴通 (2012)：規模と立地からみた米国のポピュラー音楽系博物館等展示施設の諸類型. 人文自然科学論集 (東京経済大学), 132, pp.27-54.

山田晴通 (2013)：立地からみた日本のポピュラー音楽系博物館等展示施設の諸類型. 人文自然科学論集 (東京経済大学), 134, pp.3-23.